

## 目 次

・創立5周年記念出版を祝して	(社)兵庫県建築士会会長 長谷川 哲之助	2
・女性部会発会の思い出	(社)兵庫県建築士会監事 山 本 潤 吾	3
・5周年	女性部会部会長 鍵 野 洋 子	3
I. 私と建築		4
1. 龍野の家	中 川 俱 子	4
2. 私と建築	永 福 より子	6
3. 建築に愛を	野 崎 瑠 美	8
4. 内見さんの家	福 江 順 子	10
5. しごと一仕事	村 上 玲 子	12
II. 私と仕事		14
1. 身障者用エレベーターを入れて下さい	上 原 柚 子	14
2. 建築業こそ我が人生なり	上 山 寿 子	16
3. 建築魂と生活魂	長 部 幸 子	18
4. 「いえ」の寿命	木 本 和 子	20
5. Information	杉 本 和 子	22
6. 住まいを考える仕掛け人になりたい	鈴 木 洋 子	24
7. 選んだこの仕事	武 野 朋 子	26
8. 集合住宅における共有空間	垂 水 百合子	28
9. 椅子	長 瀬 真理子	30
10. 私と仕事場	森 本 康 代	32
11. 私の挑戦	高 松 洋 子	34
III. 私と住まい		35
1. 私の住まい	阿 部 保 代	35
2. すまいの公私領域	鍵 野 洋 子	36
3. 最近の我が家作りの構想	荻 谷 君 代	38
4. 名谷コープタウンについて	栗 林 郁 子	40
5. 人間生活の基盤になるすまい	小 西 文	42
6. 住まいのグレード	内 藤 玲 子	44
7. セカンドライフのセカンドハウス	藤 田 昌	46
IV. ・昨日・今日・明日	中 川 俱 子	48
・住まい研究会	木 本 和 子・鈴 木 洋 子	49
・女性部会名簿, あとがき	武 田 百 合	50

## 創立5周年記念出版を祝って

(社)兵庫県建築士会  
会長 長谷川哲之助



今回、記念誌を刊行され真におめでとうございます。つい先日発足されたと思ったのに、早や5年が経ったとは早いものです。一つの区切りとして部員全員参加の自分誌を出版されるとは、さすが女性部会、やる～といった感じです。

女性部会のこの5年間は、歯車が旨く噛み合い、本当の自主的運営をされると、この様な立派な成長をされると言う見本だと思えます。又見方を変えれば、一つの団体に加入したメリットを獲得された見本だと思えます。皆様もそれを感じておられればこそ、胸を張ってこの出版を思い立たれたと思えます。しかし、そうは云っても各論では、色々有ると思えます。この冊子を踏み台として次のステップを期待致しております。

以上がお祝いのご挨拶ですがもう少し紙面が戴ける事になりましたので、皆様にあやかって自分誌と行きましょう。この5年間と云えば、会長に選ばれた時と期を一にしており

ます。その間、建築士試験、指定講習会、県イベントへの協力等々、今迄に無い事態が次々と起こり会員皆様のご協力の下に何とか切り抜けて来ました。又財政面の検討から始まり、士会体質見直しの実に立派な提言を戴き、お陰さまでナウイ運営を行うことが出来ました。それらの経過で、貫いて強く感じられた事は、士会の活性化を求める心でした。

それに対して充分な対応が出来なかったことを残念に思っています。その点女性部会の活動は、大きいインパクトを与えて下さったと信じております。活性化の基本の一つは、やはり支部活動の活発化だと思ひ、現在進めているブロック制の整備に期待を寄せております。部会の皆様も所属支部でコミュニケーションの輪を造る等大いに頑張ってください。

《天は自ら助くる者を助く》と云います。士会の発展のために絶えざる気配りをお互いに致しましょう。

## 女性部会発会の思い出 五周年

山本 潤吾  
(監事)



会勢委員会は、4月に新入社員研修会を大きな事業として、毎年取り組んできましたが、これも見直しをする時期でした。委員長の最後の仕事として何か建築士会の記録に残る事業を考えていました。昭和40年の始めごろ、初めて会勢委員に任命された時の委員長は、大木さん(大木工務店社長)で、やはり最後の事業として青年部会の設立を呼びかけられ、県下の若手の有志を集めて六甲山で初の会合を開かれ、それが今の青年部会の誕生となりました。よし、私の最後の事業として女性部会を作ろう。と当時、士会の理事をしておられた神戸大学の嶋田先生に相談すると、「中川と鍵野がおるがなー。」と教えていただき、このお二人のお力と会勢委員の努力で会合を開き、めでたく女性部会の発会となりました。県民会館だと記憶していますが、金野会長、長谷川副会長をお招きして会勢委員会全員が参加して発会式をあげたのが、昨日のように思われます。

鍵野 洋子  
(女性部会長)



振りかえって見ますと瞬時だったような気がします。その間多くの方の御支援により、部会活動を進めて参りました。5周年に際しあらためて御礼申し上げます。

建築士会活動はアフターファイブの会ですから、仕事と家事に忙しい女性にとっては、参加は困難なものです。時間とところのゆとりがなければできません。士会参加のメリットはという問いかけが、男女にかかわらず、常にあるようですが、この「心のゆとり」と「現在の仕事や生活の範囲以外の人との交流ができる」機会のために、ぜひ時間をつくっていただきたいものです。

当初の部会役員の方の努力により部会員数も増加し、活動も盛んではありましたが、少々忙しすぎるきらいもありました。「5時から」と「5時まで」のバランスがとれ、かつ楽しく有意義な活動の方法をさぐっていくのが、今後の課題だと思っています。

## 竜野の家

中川 侑子  
(神戸支部)

### 執筆者のプロフィール

神戸市住宅局, いるか設計集団代表取締役を経て, 1級建築士事務所, (株)アルプランを開設。  
・趣味 水泳, 絵画, 映画



最近、「台所空間学」山口昌伴著を読んで、感動した。

すばらしいエネルギーで台所への考察を行っている。台所空間学という学問を成立させようという書物である。

日本列島台所探検のみならず、海外台所探検、ネパール、エジプト、韓国、中国、フランスへと探検に出かけている。そして、日本における台所空間の変遷、型態、未来へと著者の考察は進んでいく。

今まで、私が望んでいたような書物だった。

これまで私が設計した住宅で、食べる営みに対して、ここまで真剣に対応してきたか、恥ずかしく思う。

施主の要望をまとめ、豊かな空間づくりに力をそそいできたが、台所はメーカーのシステムを施主と共に検討し、選択してきた。新しい台所を創り出すまでには至っていない。

去年の秋に完成した「竜野の家」は、台所に続いて、半屋外空間である土間、納戸、そして食堂の東側にはテラスを設け、のびやかな食べる場を設計することができた。

今後、美味しい台所、さまざまな火のある、電気、ガス、炭の使える台所、かつての日本にあった、他人の出入しやすいオープンな台所を設計してみたいと思う。

「竜野の家」は居間に暖炉を設けた。赤々と燃える薪を見ながら、話をしていると、時間



居間

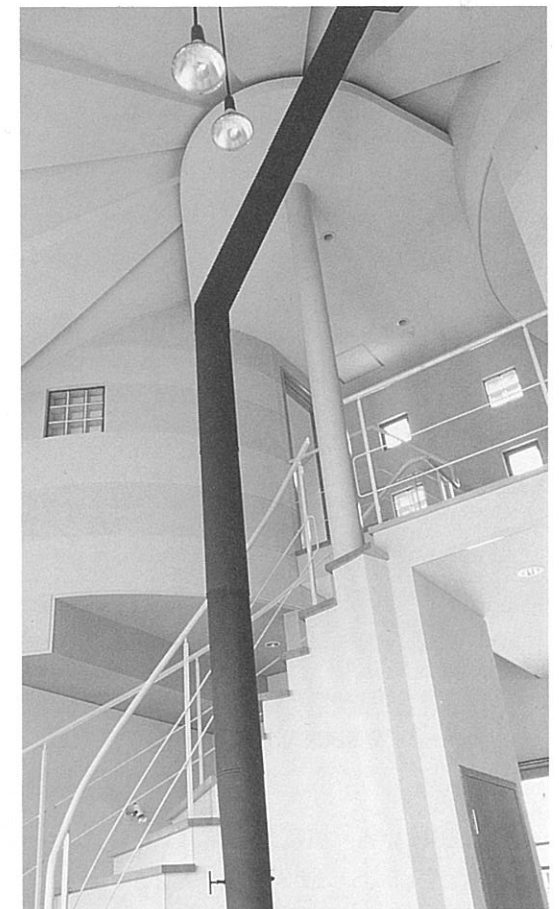
がさらさらと流れていき、のんびりとしたやさしい気持ちになる。

住まいには時をきざむ、こうした装置が必要なのではないだろうか。

豊かな空間、美味しい台所が、豊かな生活を創り出す。豊かな生活を望むことの大切さ、そして何が豊かなのかと、追求することが、今後の私たちの課題ではないだろうか。

経済追求も大切だろうけれども、個人の時、友人の時、家族の時、自然と親しむ時を持たない生活は豊かではないだろう。

現代の都市住宅は閉ざされた私的な空間でありすぎる。もっと家族以外の人々が、参加しやすい空間の仕組みが必要。



居間天井見上げ

大勢の人と共に立ち働らくことのできる土間のある台所の現代版、協同で料理をつくり、パーティを開く。又、家庭菜園の野菜で料理を楽しむ。土と光と風が通る、伸びやかな住まい、素朴でどっしりとした生活が創り出せればと思う。それは、集合住宅であっても可能。今後、高齢化社会が進むにつれて、管理の面倒な戸建よりも、豊かな集合住宅の方が、望まれるだろう。

私はさまざまな分野の友人たちと、遊びと学習を深めながら、人の輪を広げていきたい。そして、友人たちと共に、今後の私たちの集合住宅を手づくりできれば、楽しいだろうと夢みている。

私 と 建 築

永 福 より子  
(神戸支部)

執筆者のプロフィール

1946・4・29 神戸市に生れる。  
奈良女子大学家政学部住居学科卒  
黒田建築設計事務所勤務を経て現在明石短期大学  
助教授  
趣味：モーツァルトを聴くこと。



玄関ホール・柳原義達氏作「鳩」が置かれている。



2階吹抜から1階ロビーをみる。

●明石短期大学・福富記念館 (1986)

RC (1部S) 造 2階建 延2292 m<sup>2</sup>

1階—視聴覚ホール・図書館・コンピューター室など。

2階—体育館

私の勤務先である短大で、創立20周年を記念して建てられた。黒田建築設計事務所の設計で私は学校側として、又設計者として参加した。コンクリートのもつ質実な重量感を力強く表現することをデザインポリシーとし、運動場側に面した大きな壁は特殊型枠を使用した打放し仕上とした。又内部も明快なプランとトップライトなどによる光の計画で緊張感のあるドラマチックな空間づくりが成功したように思う。

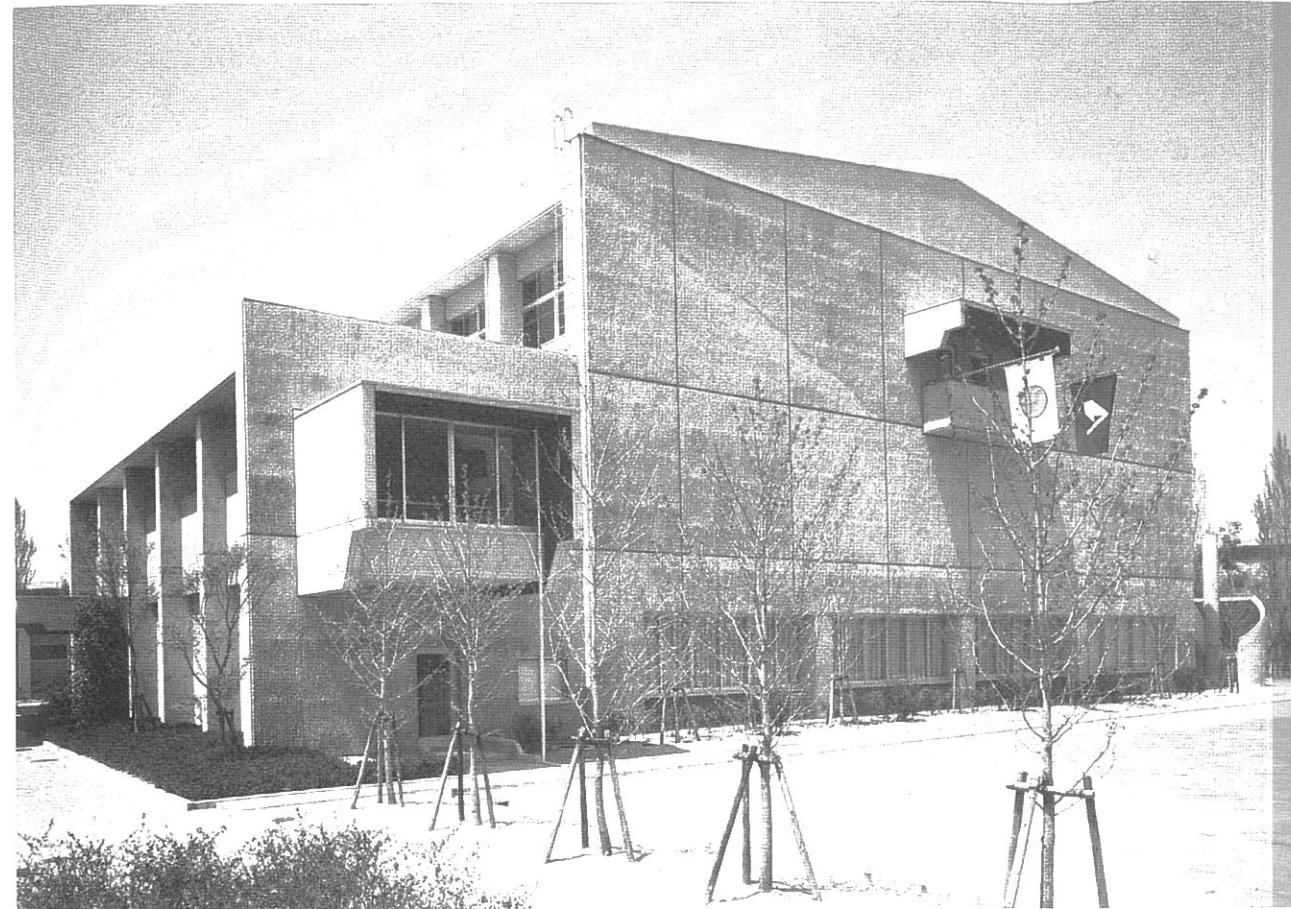
●神戸ファッション専門学校 (1988)

(旧神戸ドレスメーカー学院)

RC 造地下1階地上4階建 延2130 m<sup>2</sup>

この学校は新神戸駅から三宮へむかう生田川沿にあり、周辺を見渡すと高層ホテルが新築になり、地下鉄や新幹線、新神戸トンネルなどの交通の要所にもなっており、新しく生まれ変わろうとする神戸の息吹が感じられる。設計にあたってはファッション都市神戸の基地となるような活気に満ちた斬新なイメージを出すよう心がけた。

立体と円柱を組み合わせたフォルムは単に外観のデザインだけでなく、内部空間の自然なふくらみによるものである。円に沿って玄関ホールに入ると、階段や通路にあふれる学生達の赤や黄色の服装が吹抜の白大理石に写って空間を若々しく活気あるものになっている。



明石短期大学 福富記念館



神戸ファッション専門学校

## 建築に愛を

野崎 瑠美  
(神戸支部)

### 執筆者のプロフィール

神戸女学院大学文学部社会学科卒  
 東京にて、象設計集団四谷時代参加  
 都市環境企画設計事務所を経て、  
 昭和53年 象設計集団神戸アトリエ設立  
 昭和55年 いるか設計集団に改名  
 昭和61年 遊空間工房を設立主宰、現在に至る。  
 趣味 テニス、映画、読書、編物

私が、いいものを創らなければならないという建築への使命感と、建築家の思い上がりを見の当りにして悩んでいた時、自分の建築家としての道を示されたようで、ホッと肩の力を抜くことが出来た本との出会いがあった。それは早稲田大学の教授、吉阪隆正先生の遺稿集第9巻、「建築家の人生と役割」の中の三つの建築家像という章である。読まれた方もあるかと思うが、是非ここで紹介しておきたい。

それに依ると、建築を目ざすものは次の三つのどれかを選ばざるを得ない。一つは、用への奉仕、すなわちその時代の体制の維持に尽す為に、用を物に翻訳する技術を提供する人達。世の必要を満たすのだから、当然金儲けもできるが、要求は外から与えられるから、その主体性のなさを技術に没頭することで諦めざるを得ない。これに対抗するのが、筋への奉仕。人類の為の本質的な要求を探り、造形とは、創造とはに悩み、それがどこまで真理に肉迫するか、他者に表現として認められるには時間がかかるかもしれないが、実を捨てても名をとるといった超現実派である。

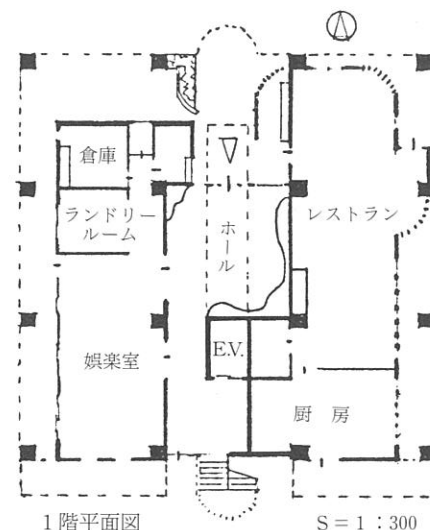
三番目が、私を鼓舞してくれたもので、愛への奉仕、という表現で書かれている。近隣の人々の生活の場の細々とした所まで気をつかい、人の心の求めに応じて、ささやかながら色や形を選び、その積み重ねが町全体を住みよいものにしていくだろう。この途を選ぶと、名も出なければ、大計画を担当せず金も

ついてこないかもしれない。不幸なことに、今の世の中の流れは、そういう努力をする人を尊敬しない。しかし、生み出すことに力を致すものが覇をとる価値のあり方から、あるものを育てることの方が大切だという価値に重点を切り換えなければならない、と結んでいる。

私は、女性こそ、この第三の立場で建築にかかわることが出来る特権を持っていると思っている。周りの人に感謝されるような心配りのある建築を目指していくことが、今一番必要とされていると思うし、ささやかな立場でも、それが支えになると信じている。

ここで紹介する作品は、広島県福山市松永に昭和63年3月に完成した、学生を主とした単身者用ワンルームマンションである。規模からいうと、今まで私の携わった建築の中で最も大きいものとなったもので、試行錯誤をしながら仕事を続けてきたなかでの、一つの成果と云えると思う。

松永は、長い間、塩田と下駄と畳表で業いをなしてきた古い土地柄であるが、時代の流れでその産業がすっかり様変わりしてきている。また、松永の北部に位置する私立福山大学は、学生数4千名余に及び、もっと文化的にも充実されることが望まれる。時代の流れと共に、その土地は歴史を刻み、後世の人に伝えるに誇れるものでなければならない。地方の活性化が取り沙汰される昨今、沈滞したムードの地方の街に、一つの刺戟を与えることによる



波及効果を期待しつつ、また学生を大事にする環境づくりを目ざして、建築設計に臨んだ。

建物は、プランで見るとおり、一階にレストラン、娯楽室、ランドリールーム、管理室、倉庫などを配し、住者へのサービスを心がけた。街に賑いと人のふれあいの場を持つ為に、レストランを設けたことは、建物全体の活気の為にも成功したと云える。個室は2階から8階まで60室、三つの広さのタイプがあり、各室共、机、本棚、畳ベット、クローゼットなど家具は全て造り付け、他にユニットバス、ミニキッチン、冷蔵庫、冷暖房機、電話など設備も全て完備している。デザインは、素材そのものを生かすというコンセプトで、コンクリート打放しに、グリッド状に玉砂利洗い出しをアクセントにし、アール状のガラスブロックとレンガの植栽帯が段々にセットバックしていく所がポイントである。デザイン上の細かな点は、紙面が足りないので割愛する。敷地は、商業地域で、すぐ北には福山市役所の支所や図書館、公園等が並び、町の中心地となるべき所である。敷地の横を流れる水路を活かした水辺公園の提案も、ストリートファニチャーや照明計画を含めて、レポートとして作成した。5年後、10年後この辺りがどのように変化していくか楽しみである。



北側正面



1階エントランスホール



ホールコーナーベンチ



8階屋上よりテラスを見る

## 内見さんの家

福江 順子  
(神戸支部)

### 執筆者のプロフィール

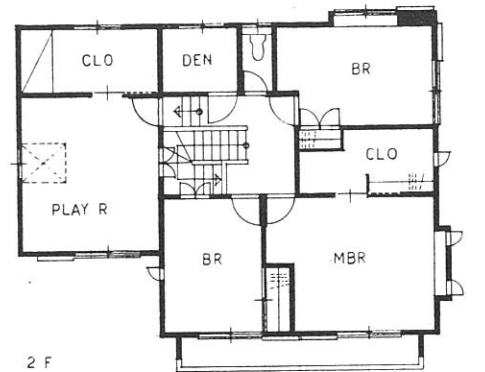
昭和22年 福岡県福岡市生まれ  
 45年 九州大学工学部建築学科卒業  
 47年 同大学工学部建築学科大学院卒業  
 47~49年 川崎重工業建築設計部勤務  
 50~54年 谷川建築設計事務所勤務  
 54年 福江建築設計事務所設立  
 今日に至る

●現在の住まいをよく見て、よく聞いて、よく話し合っ、スタート

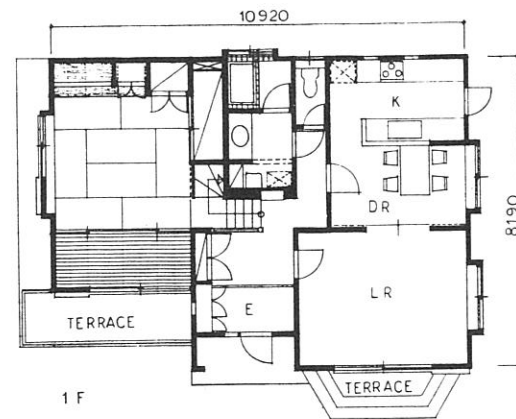
主人の会社の同僚である内見氏から自宅の設計依頼があったのは昭和61年夏であった。設計を考えると、家族が現在どのような住まい方をしており、どのような点を改善したいかを聞きとる事が、より快適な住まいを作る第一歩となる。施主の要望は明確で次のようであった。①平屋建から2階建への建替の為、北側隣家の日照を確保する。②玄関はできるだけ広くしたい。③リビングとダイニングはオープンなつながりをもたせる。④キッチン是对面式とし、南の庭が常に眺められるようにしたい。⑤オーディオを楽しめる広いプレイルーム。⑥客間として広縁付和室を1部屋、西側に設ける。⑦ガレージ2台のスペース。⑧納戸など収納スペースはできるだけ多く設ける。

●5つのゾーニング分けをしたスタディプランの検討

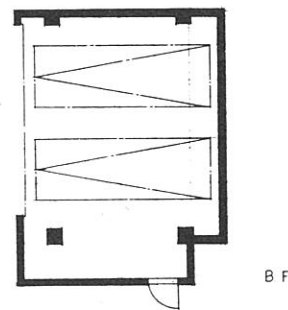
建設地は西南の角地で、隅切りが有り、道路との高低差は約80cmである。ゾーニングは、ホール通過ゾーン(玄関、ホール、廊下)、パブリックゾーン(L.D.K)、プライベートゾーン(夫婦室、子供室、書斎)、サニタリーゾーン(洗面、バス、トイレ)、プレイゾーン(ホビー、遊びのためのプレイルーム)、の大きな5つのゾーンに分けた。日当りのよい東南部にリビングを、続けてダイニングとキ



2F



1F



BF



内見邸外観

ッチンを配した。敷地の高低差を最大限利用して西入りの地下ガレージを設け、その上の中2階に和室、中3階にプレイルームを配し、平面プラン全体を東西にスキップさせた。このスタディプランで施主と検討に入った。平面構成は最初のプランで何なく決った。その後模型を作成し、屋根の形状、素材について検討を重ねた結果、二度焼窯変瓦に落ちついた。

●詳細打合せから引渡しまで

内見氏は機械設計のエンジニアであり、詳細設計打合せ及び工事に対する注文はかなり厳しく、大変であったが、最終的には工務店の頑張りや協力もあって、なかなかの出来ばえに仕上がった。インテリアについてはシンプルが基本で、具体的なところは全て任された。完成した住まいは、コバルトブルーの空を背景に、赤レンガ色のS瓦葺屋根と、外壁スタッコの白が美しいコントラストを見せている。施主との出会い、工事業者との打合せ、工事監理等、すべて一貫して見守る事が出来た。しかも最終的には施主に大変満足してもらえ、

本当に良い経験であり、印象に残る仕事であった。これまで17年間建築設計に従事して来たが、最近になってやっと自分がやるべき仕事がかかって来たように思う。小規模でもよいから、一つずつ納得のゆく建築物を設計してゆくの、自分に課せられた義務と感じている。建築家の仕事は芸術的分野に入る仕事もあるが、良質で実用的な建築を作るのも、その一方で非常に大切な仕事と思っている。今回の内見氏は建築設計に携わる知人があって、詳細な打合せの結果、満足のゆく住まいを作る事が出来たが、その他多くの人々は、我々の存在をほとんど知らないうちに家を建てているのが現状ではないか。我々の意志とは別に、建築家は余りにも、一般の人々にとって疎遠な存在ではないだろうか。顧客に対するPR、これは我々が手を結んでやらなければならない急務だと思う。

## しごとー仕事

村上 玲子  
(神戸支部)

### 執筆者のプロフィール

生年月日 S××年9月10日  
 出生地 東京都  
 学歴 神戸大学工学部建築学科  
 職歴 神戸大学工学部建築学教室助手を経て  
 現在フリー  
 趣味 山野巡礼

ここ1, 2年, 建築業界は活況あふれ, 忙しそうである。私の場合は, 個人事務所で, 引き受ける能力にも限界があるので, 世の中の動きにも関係なく, のんびりと仕事をしている。最近ではインテリアを含めた増改築, 過去の仕事の建替え等のはなしがあり, 建物も材料も古くなり, ライフサイクルもライフスタイルも大きく変わる時期にきているのだと, 改めて自分の年を思う。先輩, 後輩, 同輩と見廻しても, 質, 量ともに, 建築家と呼ぶにふさわしい仕事を蓄積し, し続けている人達に比べ, 自分の質, 量は, 何と軽微なものかと, 自覚する。飲み物でいえば, アメリカンもよい所である。されど仕事なのである。合格点ももらえるかどうか, いつも真剣勝負ではある。また最近インテリアに世間の関心が集まって, 空間に工学的な詰めより, 感性に重きがおかれ, 概念的な空間作りは, 古いとされ, 住み手, 使い手の心が伝わって来るようなインテリアが増えた。かのようなのだが, 却ってイタリアン・ブランド風にお茶を濁しているだけなのかもしれない。然し, インテリアは, 独立しては存在し得ないので透明ガラス越しに見える外のグリーン, 雲, テラス等も絵になるようにかんがえる。感性は断続ではないので, シークェンスとして, 環境造りにも一役買っているのではないかと, インテリアに価値をおいている。

さて, 前置きが長くなったが, インテリア, エクステリアも含めての実設計の一例を掲

げさせていただく。オープンして一年になるジェラードとスパゲティの180 m<sup>2</sup>程の店である。設計のポイントは, 先ず, 付近の状況から, 国道に建物をできるだけ接近させること, その上ほこりっぽく感じさせないこと。内部は特色のあるスペースをそれぞれインパクトを与えながら, 流動的に継げること等である。例えば, ガラス張りコンクリートで, 公園に寛ぐような感じ, またフカフカのクッションのベンチ・コーナーに, アットホームな雰囲気, また何でもないスペースといった組み合わせである。

壁にはリトグラフを二, 三点で完成と思っていたら, 好みの違いで, シティ感覚もおもちゃ箱に押し切られた。蛇足ではあるが, 事情により, 実施設計を二度やり直す羽目になり, 設計者にとっては, スタミナ切れ, 時間切れということで平凡に終わってしまい, 残念であった。

次の例は, 三竿修一氏が設計をし, 内装, オーナーの住戸のプラン及びインテリア等を協力させてもらったマンションである。これからも, 一人ではこなせないような仕事でも, 一部もしくはインテリア・プランナーとして協働という仕事ができればと思っている。



レストラン「ルーリー」  
▲東面 S.62

◀西面

▲インテリア

アーバンハイム洲本  
▼ S.61



## 身障者用エレベーター を入れて下さい

上原 柚子  
(神戸支部)

### 執筆者のプロフィール

昭和39年神戸大学建築学科卒  
現在「U&R 設計室」自営  
二男一女の母

かの「違いのわかる——」岩城宏之が、「日本ほど障害者にとって生活しにくい所はない」と、言ったという。いくら「違いがわかっ」ても、彼が障害者でなければ、この言葉は、なんの説得力もない。彼自身が、思いがけず、頸骨の損傷で車椅子の生活をよぎなくされてなお、世界をまわった人だからこそ、その言葉に重みがあり、あらためて、日本の現状を思い知らされるというものである。

急に話は建築のことになるが、設計をやるものは、経験などなくともなんでもやらねばならない。住むところひとつとっても毎日そこにどっぴりつかっている「普通の住宅」から、あんまり経験のない「刑務所」から、さぞかし将来御厄介になるだろうけれど、いっこうに実感のわからない「老人ホーム」まで、これは、知りませんのでやれませんなんて、いってられない。

全くの所、その「普通の住宅」にしても、しかけた舞台から、設計者退場して後、どんなドラマが進行しているのかさっぱりわからない。お恥ずかしい話私においては、設計した「お家」を何年かのち訪問するのは、こわくってしょうがない。雨が漏ってないだろうかなどの不安は多々あるが、想定したドラマが大筋から狂ってくるという事もある。すったもんだして、せっかくつくった息子さん夫婦の部屋など物置と化し、キチネットは、かんからかんにかいてるなど、ざらである。

むろん住むところに限らず、建築屋は、精

神病院から能舞台まで、なんでもやらねばならない。住宅ばかりやっている私など、こんな建物はさぞ大変だろうなと思う反面、特定のドラマが想定され、その筋の専門家もいて気楽かななど、勝手に思ったりする。しかしその筋の専門家というなら、住宅でも、ある程度の年配の「奥様」が、そうであるともいえる。私は、あまり数をやっていないせいか、非常に施主に恵まれていて、この「奥様」から教えていただくことが、とても多い。

「住まいは、少し無骨な方がよろしい。」などは、いろいろ反対の向きもあるだろうが私にとっては、大切な指標である。「階段は物置台にあまりにも適して困ります」など、これを利用してなにか他の発想はないかと考えさせられたりする。

ワンプロジェクトごとに、はっとさせられる奥様方（なぜか旦那様ではない。あたりまえか！）の名言集を編纂したら、きっと面白いものができるだろうと思う。

最近の事である。大きな住宅を設計することになった。施主は、はつらつと生きておられる熟年夫妻である。それが身障者用エレベーターをつけてほしいといわれる。一体誰が利用するのかという質問に「我々」という返事。しゅうと姑が共に足が萎え、車椅子の生活だったとのこと。自分達も老いの日は必ず来る。寿命は長くなっている。その為の対策を今からきちんとたてておきたいとの事。

怠け者の私は、びしっと殴られた気がして

動きだした。もともと、老後対策についての必要性は、強く感じてはいた。私の周りには老人が多く、しかもそれぞれ問題を抱えている。一人暮らして突然たおれ、一日後発見されたが、もうだめだった母の友人。一人で暮らすとってがんばっていたけれど、誰がひきとるかさんざんもめた末、とうとう娘の所へ引き取られたは良かったけれど、急にすむ場所が変わって、家の中でころんで骨折し病院へ入ってほけてしまった92才になる私の叔父。又、その病院の月々の支払いが20万円にもなるので、良い老人専用病院を捜そうにもみつからないという話。高齢社会に対する社会的な制度のお粗末さは、岩城宏之でなくとも皆かんじているのだが……。

遅れ馳せながら、ちょうど女性部会で「高齢化社会をかんがえる」というテーマでの研究会が発足したとの事でのぞいてみたり、学会が母校であって、そのテーマを取り上げているとの事で行ってみたりした。さすがに、今注目されているテーマだけあって出席者も多かった。社会的な問題として、まずとらえられている事は、確かに良いこととおもえた。個人的レベルでなにをしても、結局は、ぶつかってしまう壁であるのだから。

又最近雑誌紙上をにぎわす「明るく素敵」な老人ホームの存在も、老人ホームの有り方そのものに疑問はあるが、この問題を明るくとらえるきっかけとなっている。どうしても、「古い」は、暗い、見て見ぬふりしたくなることだから。

しかし、さて住宅におけるその問題についてのアプローチとなると、なんだかまだまだという感じである。むかーしからいわれて来た事にエレクトロニクスで味つけただけのような、ぞんざいな、表面的な事をすこしばかり並べただけのような感じである。女性部会でも、あまりに多様な問題に、結局取り付く場所がないまま、毎回のミーティングが終わってしまった。

各住宅メーカーが「身障者用住宅」と銘打って、作り出したモデルハウスもいくつか見

にいった。まるでビックリハウスのようなしかけのある家、さぞ高くつくことだろう。若い身障者なら、こういうものもいいたろうが、年寄りとなるとどうだろうか。いつまで使うかわからないし、まず使いこなせないだろうという感じだった。

実際、老人と身障者は、同じレベルでは、考えられない。

老人は、まず、進行していく状態に応じてどの程度介添えが必要となるのか。そして、「誰が介添えをするのか？」が大きな問題となり、ここで、社会的「ケア」が、クローズアップされてくる。「家族」の形が、大きくかわってしまった現在、この問題を抜きにしては、老人対策は、骨抜きになってしまう。

しかし、これは、あまりにも大きな社会問題であり、私は、まず、目前の「老後対策を考えた住宅」を設計していかねば、ならないのだ。

しかし、実際手をつけてみると、車椅子ひとつとっても、乗り換えやすく、しかも、従来より、軽く、幅の狭い物というのが、次々出てくる。にもかかわらず、決定版がない。それによって、入り口の幅も、廊下の幅も決まる要素であるのに。又、エレベーターも、どの業者も「現在開発中」で、全く帯に短し、たすきに長しである。それでも、段差のない床、手すり、腰板、セキュリティ、など考える。しかし、……これらが、本当に必要になったとき、息子さん夫婦（今まだ学生）と一緒に住んでくれるやら？ この設備が古くなりすぎないか？ など、疑問は、不安となって次々沸いてくる。それでも、現時点であえて「身障者用エレベーターを」という、施主の勇気ある決断に鼓舞され、又自分の近い将来像をかさねあわせ、ひいては、あつかましくも、「人生」とは何かをかんがえさせられながら、施主と暗中模索しながら、この問題に取り組んでいかねばと思っている。



## 建築業こそ我が人生なり

上山寿子  
(竜野支部)

### 執筆者のプロフィール

昭和14年4月20日生  
神戸(かんべ)中学校卒業  
(有)上山工務店代表取締役  
趣味は、何か講習を受けたり旅行すること。

建築の勉強は無限です。私のやっている事など、建築のケの字にもおよびません。

その私が女性部会の記念誌に投稿するなどおこがましいのですが、山奥の田舎にも女性部会員の仲間が居ることを知っていただくのにはいい機会だと思います。

私は貧乏人の子沢山で育った中学卒です。三人の子供の母親として、ただの田舎のおばさんでした。しかし40歳近くになっても何か勉強したい夢は捨て切れませんでした。

大工の主人は、建築士を受験したのですが駄目でした。そのかわり一級技能士を取得しました。子供に手もかからなくなったし、二級建築士は学歴がいらないので、これ幸いと私は決心しました。何年かかろうと挑戦してみようと。

昭和52年7月24日に受験しましたが、西播地区で女性が受験したのは初めてだったそうです。その年女性は二人でした。残念ながら製図で落ちましたが、翌年西播地区女性建築士第2号となりました。

私は、建築士と言っても製図が描ける訳でも、カンナやカナヅチが持てる訳でもありません。せいぜいお客様と一緒に平面的プランをねるぐらいです。そして5人の大工さんの仕事を確保するのが私の仕事です。

営業は大変です。人間を磨く為にはもっともっといろんな勉強をしなくては駄目だと思います。ある勉強をすることに決めました。

もうこの時すでに私は、工務店の全責任を

背負っていました。主婦の仕事はもちろん、仕事の段取りも、お金の工面もしなければならぬし、その大変ななか2万円の月謝を支払い、教材費、ガソリン代、高速代と、月4~5万円使っていました。一週間に一度、一日も欠かさず西宮へ10カ月間通いました。

お金を使うことが趣味のような私は、いまだに一円の蓄えもございません。しかしこの先生のおかげで「こんな人生があってもいいじゃないか」と怖いもの知らずに開き直ることができました。夢を持つことができました。

こんな貧乏工務店にでも融資をしてやろうという銀行も見つかりました。気が遠くなるような借金をして、私は乗るか反るかやってみる事にしました。

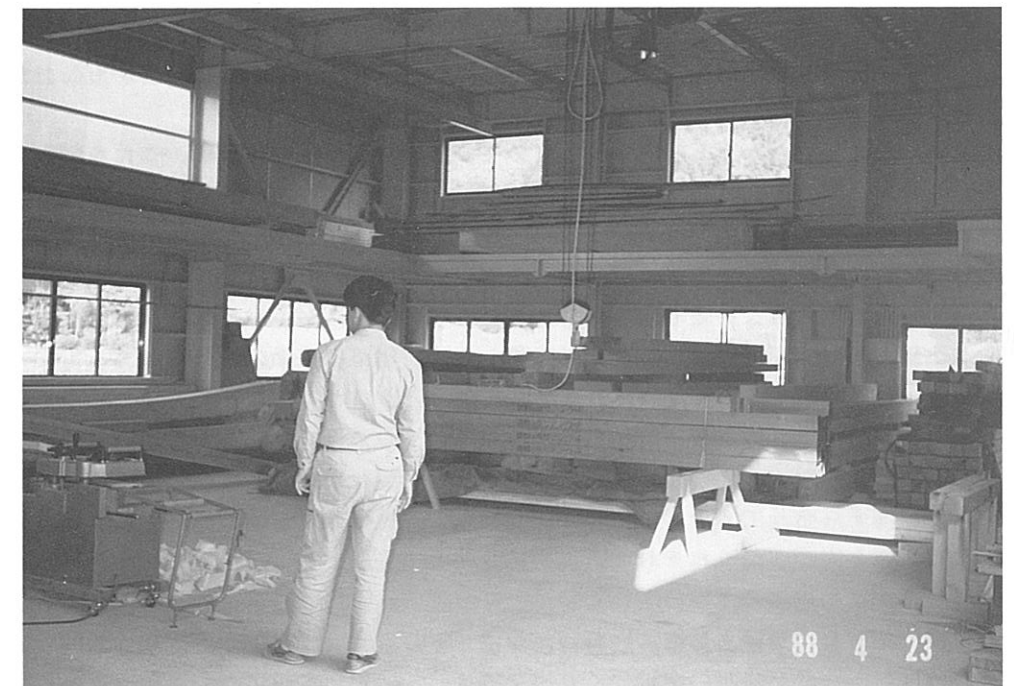
まず最初に、天井クレーンをつけた240㎡の作業場、中二階80㎡の材料置場が今年2月に完成しました。肝心の私の夢の場所は、三階にあたる240㎡分です。悲しいかな計画はしておりますが資金足らずでまだ仕上がっておりません。

その夢が何時実現するのかは未定です。もし仕上がっても、あまりの負債の大きさに人手に渡っているかも知れません。

それでもいいんです。やってみたいんです。これが私のこの世に生まれてきた証しです。そして一軒でも多く、心の通う家造りに協力させて頂くのが私の幸せです。



(有)上山工務店 北側



作業場

## 建築魂と生活魂

長部 幸子  
(阪神支部)

### 執筆者のプロフィール

生年月日 昭和14年5月23日  
 出生地 神戸市  
 学歴 神戸大学工学部建築学科  
 勤務先 長部建築株式会社取締役  
 趣味 テニス、ゴルフ、バスマフィッシング

今になって、しみじみ思います。私は大学でもっと建築魂をたたきこんでおくべきだったと。女性でも、今バリバリと仕事をしている人達があります。それに比べて一体私は何なのだろうと情けなくなることがあるのです。思えば、私が建築を選んだのは大した動機があったわけでも、大したあこがれがあったわけでもなかったらしいということに気づきます。

女性も職業をもたなければという意識から、住宅に多少の興味があったので建築学科を選んだのです。大学では熱気あふれるグループがあったのかどうか、私はそれにふれることもなく、ごく自然に単位をとり卒業設計を楽しんで卒業しました。よい友人達をえて嬉しいというのが、私の建築学科卒業に対する実感でありました。だから、今思い返してみても、あの頃建築に対する熱烈な情熱、いわば建築魂というようなものを自分自身の中につくり出していたならば、今とは少々違った人生になっていたかもしれないとも思います。

3ヶ年の設計事務所勤めで図面引きに携わって後、結婚してその事務所はやめました。

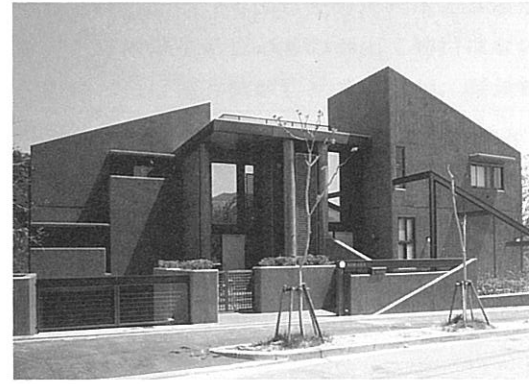
そうして送った20数年の家庭生活、夫の両親も看取りました。3人の子供にも恵まれました。料理すら全くできなかった私が、今3人の子供達と夫からのそれぞれの訴えや、主張やわがまを適当にさばっていく生活の知恵と技術をも身につけました。いわば、生活魂だけはしっかりと自身の中につくり出すこ

とができました。こう考えてくると少しは自信らしいものがわいてくるのを感じます。建築魂はもてなかったかもしれないが、生活魂はしっかりもっているぞと。

女性が建築を専攻すると、ついこうなりやすいのではなからうかとも思います。男性だって学生時代にそう熱烈な建築魂をもちえた人達ばかりではないでしょう。しかし男性はそれを一生の仕事とし、家族の生活に責任をもちながら建築に携わっているうちに建築魂が充実してくる場合もあるのでしょうか。女性の場合、そういう外的条件がえられにくいから、つい建築魂をえる代りに生活魂の方で自分を充実してしまうのかもしれない。

建築魂と生活魂、これを結ぶものはないのでしょうか。あるような気がします。そうです「生活と建築」、これぞ建築のもつ根本的なものではないのでしょうか。生活がわからなくて、どうして建築が設計できましようか。建築は生活のためにつくるものなのでしょう。そうすれば建築をつくるということは何も特別のことではありません。われわれの生活の一部なのです。その時代、社会における人間の生きざまが端的にあらわれるものだと思います。

「まず建築に求められるものは、生活に対する機能でしょう。建築の機能というのは何かに対して役にたつということですから、その



芦屋H氏邸



枚方パークばら食堂

「何か」が何かをよく知らないで建築のよい設計などはできないはず。学校でも建築計画は習います。台所を設計する場合、料理の手順や流しの高さ、動線がどのようということも気にします。しかし、そんな単純な条件設定だけでは本当の台所にはならないでしょう。もっと深く生活の内部からでてくる条件があるような気がします。それをとらえてこそよい台所が計画できるでしょう。

それは、土地柄や時代によっても異なる条件になるでしょうけれど、自分がいま自分の生活の本質をとらえることができるならば、そのやり方で他の土地柄や他の人々の生活の本質をもとらえやすくなるだろうと思います。生活と建築はこのように関わりあっているのだと思います。

鉛筆をもつ以前に人間の生活を見つめること、これが大切なことに違いありません。鉛筆をもって線をひくだけが建築ではありません。コンピューターで構造計算するだけが建築ではありません。もっともっと大切なものがあるはず。それが建築の根本になればならないでしょう。

なるほど、近頃の建築はずい分発達してきました。超高層もできるような技術もできてきました。全身カガミで覆われたようなデザインもできてきました。

しかし、ここでよく考えなければならないことは、そのもとに技術をコントロールする人間の充実がなければならないということ

す。

建築は文化です。文化というのは人間の生きざまです。生きざまというのはまさに生活そのものでありましょう。

そう考えてくると、私にも少々安心立命の余地が見出されて参ります。

幸いにして、私の場合は夫の経営する会社が身近にあり、私もその一員として仕事に携わることができました。鉛筆をもたないにしろ、生活体験でえた知恵や感情をもとに設計スタッフとの討論に加わることができます。そのようにして私が関わりあったいくつかの建物があるということは嬉しいことです。

わが家には若い人達がよく訪れてくれます。夫が講師をしている大学の学生達、阪神間の大学に在学している外国からの留学生達、そして、私が専務理事を務めている社団法人「明美会」の人達です。社団法人「明美会」というのは青年男女が正しい社交を習い、教養を身につけてよい家庭をもつことができるようにと父が設立した法人です。

私はこれらの若者達のお役に立ちたい。私のしてきたささやかな仕事と生活をもとに、彼らに役だつことは何かをさぐり、そして彼らと共にこれからの時代がどのように進むのか、これからの建築が対応すべき社会のあり方はどうなっていくのか、などをつかみとっていきたいと思います。

## 「いえ」の寿命

木本和子  
(阪神支部)

### 執筆者のプロフィール

昭和12年、西宮市生まれ。  
大阪市立大学、住居学科卒業、大成建設大阪支店設計課、神戸大学工学部建築学研究室を経て現在設計事務所自営。  
インテリアスクール講師。

ここ数年伸び悩んでいた住宅建設を取り戻すかの様に、あちこちで新築中の家に出会う。そんな中で通りすがら楽しく拝見していた風情ある古い家が、或る日突然ブルドーザーで取壊されるのに会うと心寂しい気がする。先日御影山手に南京下見の古い洋館をみて、それが母の小学校の先生の家だったと分かった。70年以上も経っていると思われるが、ドイツ人が建てたとあってデザインも今に通用するものである。

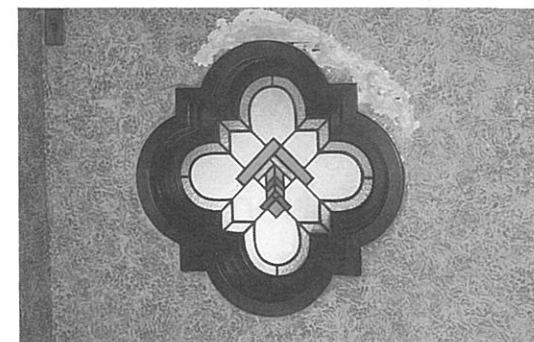
時を同じくして夙川にヴォーリス設計の住宅の改装を見せてもらう機会があった。外観はそのままで内部を最新の設備機器を入れて全面改装されていた。間取りがシンプルで一室の床面積が広く、天井も高い事が快適なリフォームへと導いた原因であろう。洋館は内外共ペンキ塗りの部分が多く、改装に好都合の様である。勿論日本の民家も外国人にその美しさを認められ、移築して住まれている例もある。古い民家に入った時のホッとする気持が共通にすまいの原点なのかも知れない。

さて話は現実的になるが、今年初め、区画整理で立退きになる住宅の新築の設計を依頼された。旧宅は建築後50年の本格木造住宅である。一見して感じた風格は凝ったディテールの集積であると分かった。6帖の広さはある玄関の右手が応接間で、建築当時から改装もあまりされていず、セピア色の写真を見る思いである。壁にはステンドグラスと暖炉があり、木製の上げ下げ窓がついている。天井

は梁型を出して、照明器具も真鍮でデザインも凝っている。家具類も当時のものを大切に使用していただける。この他2間続きの和室が1、2階にあり茶室もついている。便所も当時としては珍らしく水洗でタイル貼である。充分な広さで地窓もとられていて快適である。ここでも照明器具は一つずつデザインされている。立退き後は公園になるそうだが憩の家として利用できたらと思った。さてこの家の御主人や高齢の母堂の家に対する愛着は深く、古い部材を思い出として新しい家に少し使ってほしいという御希望が出た。使えそうな物を取りあえず取り出して倉庫に保存すると間もなく旧宅は取壊されていった……。

今建築中の新しい家には、ステンドグラスは問題なく居間のピアノの上に収めた。照明器具も掃除が大変だがレトロブームの今、充分使えるのがある。和室関係の床柱や床框等は勝手が逆で使えず、茶室部材は天井高が低くて使えない。玄関と勝手口の上り框には古材を削って利用した。建具も2〜3枚は使えそうである。そしてどこにも使う所が無いと思っていた欄間は、和室の壁面にはめ込む事にした。他にも襖の引手など使える。この様に古い部材を生かして使うには何よりも施工する人の理解が必要であるし、コスト的にもほとんどプラスにならないが、お年寄りが安らぎを感じて下さると幸である。時間のゆっくり流れたその昔、人々は丹精込めて手造りした為、デザイン的にもなかなかのものが見

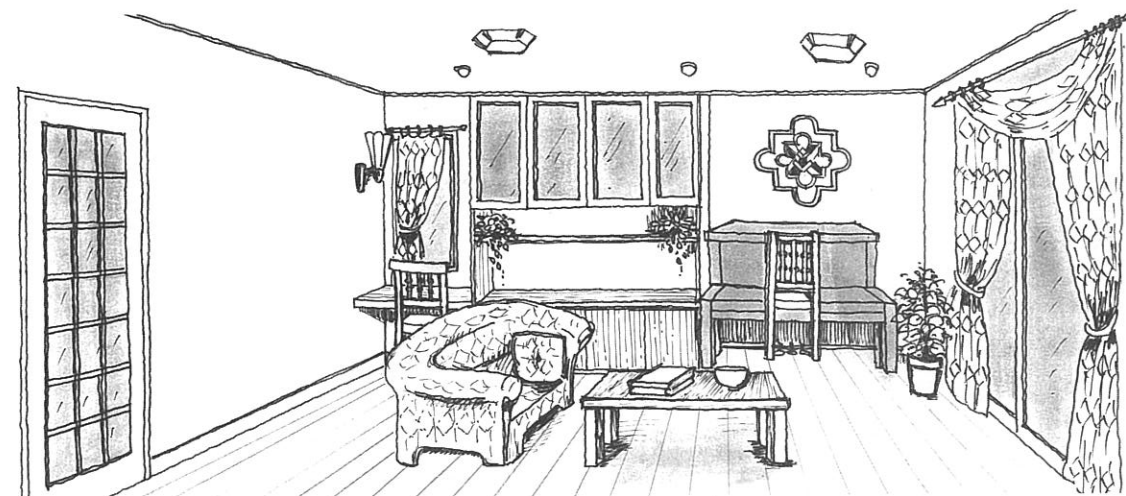
られる。この様なものは充分再利用できるが、設備だけは年々新しいものが出て勝目はない。一般に木造は増改築が容易であるが、軽量鉄骨のプレファブも部分的には可能である。田の字型のプレファブ住宅を改造した時には、間仕切壁が床勝ちであったので、いとも簡単に取壊しができた。内装をやり直すと新築の様になり、これは改造に有利と実感した。又工場生産の物を捨てるのにもあまり抵抗はなかった。戦後一早く住宅政策に手をつけたと云われるドイツを例にとっても、民家は100年、200年と修理されて住まれている。改造も外観を変える事は許されず、内部に限られ、増築も旧デザインで統一されるとか。その努力の結果、美しい町並が形成され保存されている。日本の住宅も住まいの基本的役割は変わらないにも拘わらず、急速にその姿を変えつつある。その変化(多国籍化)の流れと並んで、住まいの基本的な条件を満たし、安らげる住宅を造る、もう一つの流れも必要と思われる。日本の気候に合ったディテール(例えば低い位置で生活する為に地窓をとって、風通しを計ったり、天然素材である畳や襖を湿気の調節に利用する等々)に先人の知恵を借り、新しい技術も取り入れて、より豊かな住まい造りを考えて行きたいものである。



旧宅ステンドグラス



旧宅ブラケット



旧宅のステンドグラスやブラケットを使った居間

## Information

杉本和子  
(神戸支部)

### 執筆者のプロフィール

生年月日 昭和28年10月27日  
出生地 神戸市  
学歴 大阪教育大学  
勤務先 国土建設㈱2×4事業部  
職歴 Live-21, 国土建設

現在、私は住宅メーカーに勤務し、モデルホームの企画やインテリアのシステム作り、そして時には店舗の内装設計などを行っています。設計事務所のように一つ一つの住宅をクライアントと共に造り上げていくのとは違って、住宅メーカーでの住宅作りは、手短かに言えば「いかに手を抜くか？」に尽きるのかもしれませんが、その与えられた生産システムの中で「目前のお客さまにとって最適な住宅とは？」と常に自問しながら約2年間毎日忙しく取り組んできました。

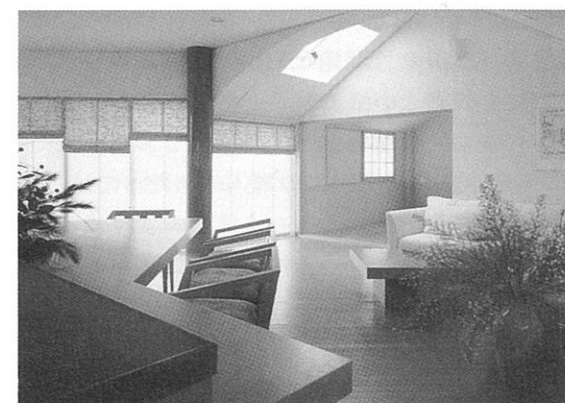
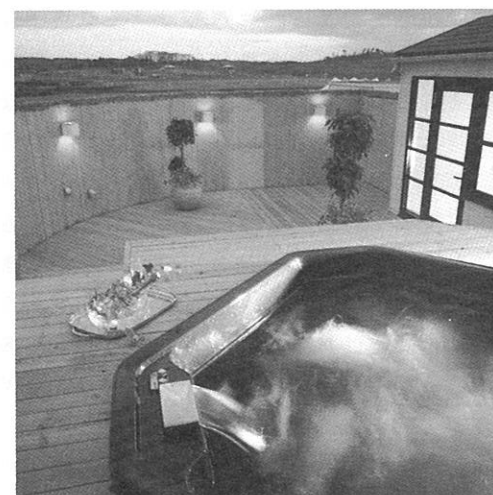
ここに紹介させていただきました写真は、主に4つのモデルホームのインテリアです。うまく写っているか、自信がないのですが実物はこの写真よりは遙かに素晴らしいと思います。

皆様もお気付きになっていらっしゃると思いますが、最近のお客様は住宅を自分の価値観で、しかも感覚的にしっかりと捕らえているようです。そのような中でいわゆるインテリアコーディネーターの役割は仕上げの品番を決めるというようなものではなく、お客様の求めている住宅に対する考え方を設計マンに伝え具体化します。そのときにはもうインテリアのデザインや外観のデザインのイメージは共に決まっています。つまりインテリアを中心とした生活イメージが決まってから、設計がスタートするわけです。

これまでの設計の進め方からすれば反対のように感じられるかも知れませんが、最近のお客様のニーズに合わせてこうなるのがベストであるようです。

今年3月には、この考え方に沿って新しいタイプの住宅ショールームを計画・完成しました。(設計：吉田年信氏)従来のショールームが仕上げ見本やサンプルの展示であるのに対してこの場合は住宅を考えるサロンのようなものです。もちろんそのために必要な情報は120%用意されています。

またモデルホームの企画会議ではその目指している顧客層にあった住宅のテーマは何か？ということからスタートして、イメージの設定まで私たちインテリアセクションの重要性が高まっています。これからも、建築のことをよく理解しながらプロジェクトの方向をリードできるようなインテリアデザイナーを目指したいと思います。



## 住まいを考える 仕掛人になりたい

鈴木 洋子  
(神戸支部)

### 執筆者のプロフィール

昭和22年生。いわゆる団魂の世代。いつも何かと騒々しく、大学もドサクサまぎれに卒業。現在は灘神戸生協生活文化センター研究部門に勤務。洋の東西を問わず、生活の臭いのする古い街並を歩くのが好き。

私の職場にはささやかな図書室がある。衣・食・住・女性問題など生活研究に役立つ資料が2万冊というのがうたい文句。だが、悲しいかな「住」といってもそのうちたった600冊余り。住関係図書の購入にあたっては、「住まい」を多方面からとらえられるよう、かなり意識して選んでいるつもりである。ところが、実際に貸し出しの人気の高いのは『美しい部屋』とか『新しい住まいの設計』などの雑誌類！ これから新築しようとか、購入するための下調べというのにも確かにあるだろう。けれど一方では、住まいという高額商品への反動がチマチマと飾り立てるエネルギーに転化し、この種の雑誌につながっているように思えてならない。

今春まで12年間女子大生と接触するチャンスがあった。卒業するためだけで「住居学概論」を選んだにすぎない彼女達の相手はシンドイ。ものごころついたら自分の部屋があったお嬢さん達にとって、住まいを考えるということは、「カーテンは赤と白のチェック。チェストを置いて……」のイメージしかない。『住宅貧乏物語』などを読んでもらえば、「この筆者はモノゴトを大袈裟に書いている」……と早川和男先生が聞かれたら眼を丸くするような感想文を書いてくる。さすがに下宿生は関西の住宅事情を肌で感じてはいたけれど……。そして、自分達が結婚したら……と言う仮定でやっと住まいに対する問題意識を持ってくれたけれど……。12年間の中ではつ

きり変わったのは「別に困っていないから今のままの住まいで良い」という生活に対する消極派が増えたこと。これでは「より良い住まいを考えよう」というには程遠い。

いま、住まいに対する女性の思いは相当なものだとか。「女性の感覚をいかした」という形容詞をつけるため、メーカーがアノ手コノ手を駆使しているのもその為であろう。でも、その女性のエネルギーは本当により良い住まいづくりにつながっているといえるのだろうか？ また、住まいに関心をよせる女性が多いといっても、全体から見れば一握りにすぎないのではないのだろうか？ 女子大生から主婦まで見ていて痛感するのは「住」に関する知識が断片的なこと。住教育といっても、学校教育では小学校から大学までごくカル〜イ扱い（扱ってくれるだけでもまだ良いほう）。社会教育では昨年こそ「国際居住年」でイベントが多かったものの、何をどう取り上げれば良いか迷っているのが大方の実状、57〜61年の間生活文化センターの生涯教育部門を担当していた時、もちろん「住まい」に関する学習会も企画した。くらしと健康を守るという大きな目標を掲げる生協でさえ、「人が集まるか否か」が企画の実施を左右する。もどかしい思いをしながら5年間に14回散発的に開催。より良い住まいづくりに必要な視点や、主体的にかかわることの大切さなど、その底に流れるものは常に一つだったけれど、どこまで参加者に伝わったことか？



楽しい住まいのゼミナール（63年7月）「台所」について意見がとびかう！

昨春突然「住の調査研究」という役割を与えられた。「国際居住年」を意識してだったと思われるが、ポストについてしまえばコチラのモノ！ とはいっても、「消費者運動体としての側面を持つ生協が取り組む研究活動とは何なのか？」調査といっても生活者の視点をどう織り込んでゆけば良いのか？「組合員にどう問題提起してゆくべきなのか？」……など考えねばならないことが山積み。生協の「食」への取組みをみると、食生活キャンペーン（ナント10年計画）や料理カードで「食べる」の問題提起をする一方、より望ましい食品を具体的な商品という形で示している。それにいたるには、過去の地道な組合員の活動や職員の取組みがあったことはもちろんだが、生活教育としての「食」の大切さが認知されている事が大きな推進力となっている。やっとスタートについた「住」への取組み。私がしなければならないのは、組合員の住意識向上を援助するための活動しかない。ひとつは、いま住生活の中で何が問題なのかを生活者の視点で明らかにする調査活動。そして、様々な手法で住まいの知識を伝える啓蒙活動。この両者が車の両輪となる活動が目標。

調査活動としては、住まいの基本のひとつとして「安全性」を中心にすえた。居住者の安全意識アンケート調査のほか、高齢者の住まいも実際に訪問。年度末には小冊子『住まい方再発見』にまとめたところ、一般の方から申し込み殺到！ 見学者の手土産に使われ

るのだけは避けたいと思っていたのでヤレヤレ。今年度はPart 2として「子供を持つ世帯の安全性」をテーマに活動中。鍵野先輩を中心とした主婦建築士4名の協力メンバーの力をどれだけ大きなエネルギーに発展させられるかが私の役目。

啓蒙活動のひとつとして、「楽しい住まいのゼミナール」を今年度は単発型学習会からシリーズ型に変えてみた。「住まい」をトータルにとらえられる力が少しでもつくように、講義だけでなく見学を織りまぜたカリキュラムは、机上の学習だけでは得られないモノを感じてもらえた様子。ほっておいても、講師の中川先輩と熱心なディスカッションになる参加者のパワーを個人の住まいづくりだけで終わらせるのはもったいない！ また、「設計」の役割の大切さが回を追うごとに浸透していくのも良く分かる。そして「建築士」の存在がとても遠いものだということも。本当はオーダーメイドがほしいのに、応えてくれる人がどこにいるかわからないので、止むなく商品化住宅を選んでいるとのこと。建築士は施主をさがし、ユーザーも建築士をさがしている！ それも女性の建築士を！

学校を出て19年。技術者、学校関係、消費者団体といろいろな層とかかわってきた事が私の財産。そして、これらの間をつないでゆくことが私のこれからの課題。ますます先輩諸姉の力借用に参上しそう。ヨロシク！！

## 選んだこの仕事

武野 朋子  
(神戸支部)

### 執筆者のプロフィール

生年月日 昭和21年12月7日  
学歴 大阪市立大学工学部建築科  
職歴・勤務先 (株)平田建築構造研究所  
巴建築設計事務所

周囲の目の色をかえた受験競争の中、ただなんとなく選んでしまった建築。あまりに希薄な選択の根拠に、我ながらあきれ、後悔している次第です。

あんな建築家になりたいとか、こんな建物を造りたいとか、建築という仕事に対する適応性の有無とか、もっと色々真剣に悩むべきだったのでしょうが……

糸の切れた凧のごとくのんびりした学生生活を送っていた頃、建築科の教室で、スライドを見ることが出来るというので出掛けて行きました。

「新潟地震」の被災状況の報告でした。超満員の狭い教室で、いつ抜け出そうかと(きっと、貴重なスライドだったのでしょうが、学生とはいつの世でもサボルことばかり)考えていると、建物のどこなのか、一見して分からないようなスライドがありました。

それは、完全に転倒した建物の基礎底だったのです。栗石のはりついた布基礎の底面は、あたかも縦横に石をはりめぐらした壁のようにも見えました。上部の建物といえば、構造上はなんら損傷も無いように思えました。

まだ、構造に対する知識もなに一つない頃でしたので、こんな頑丈な鉄筋コンクリートの建物でもかなわないとは、地震というものは怖いものだとしげいに思ったのを覚えています。

幾分か構造をかじった今なら、それは建物

の耐力に問題があるのではなく、地盤に問題があるということも理解できるのですが、まして「流砂現象」などという言葉も知らない頃でした。

卒業した翌年が、大阪で万国博覧会が開かれる年でした。事務所の主力である先輩達は、万博の現場で常駐。残った新人どうして一人前の構造家(や)のような顔をして過ごしていたのを恥ずかしく思い出します。

万博現場での様々な構造の建物は、構造設計をすれば、どんなものでも造ることが可能であると錯覚させる程、華やかなものばかりでした。「お祭り広場」の大屋根のジャッキアップ時には、なおさら技術というものは素晴らしいものと感じました。

実際に、設計にかかわられた方々は、密な検討を繰り返されたのでしょうが、経験浅い私には、技術の力で解決できないものはないぐらいに感じたのです。

そのうえ、世の中超高層ブーム。デザイン優先の設計にも、構造がイニシアティブをとる機会ができたと思いました。

そして、私にも超高層と迄はいかなくとも、それらしきもの(振動解析を要するもの)を設計する機会が訪れました。むろん、先輩のお手つだいではないのですが。

平面的にも立体的にもかなり不整形な搭状のものでした。上部には、なん層ぶんかの吹

抜けがあったように記憶しています。

当時、「霞が関ビル」や「京王プラザホテル」や「貿易センタービル」(例としては、大げさすぎるのですが)のように、規則正しい形のものも多く、そのような不整形の建物が、そのままで実現できるわけがないのですが……

所長に内緒で、先輩と東京まで見学に行きました。少人数で構成されている構造事務所でも、つぎつぎと高層に取り組んでいる姿をみて、学生時代にスライドを見た時とは異なった衝撃を受けました。

後日、学生気分で行動してはいけないとおこられ、その上、その建物は事情があって消えてしまったのです。

一年余りして、次の高層計画にかかわる機会がありました。前回と異なり、スタッフは四人。所長の許可もあり、大手を振って資料あつめに東京に行きました。

建設中の高層建物には、それまでの規則正しい形状とは異なる柔らかい形のものもあるようになっていました。地震時に、スライドする耐震壁や外壁パネルをみて、不思議な思いがしました。

この建物も計画だおれになってしまったのです。皮肉なことに、我が母校の恩師が、選挙の公約に「建設反対」を掲げておられたのです。

そして、育児に追われる日々を過ごしたのち、振動解析の仕事をする事になったのです

が、浦島太郎のような気分で、どうもうまくいきません。周囲は、頭の回転のはやい若者ばかり、頭の錆び付いたオバサンの出番はありません。

なにしろ昔は、計算機の使用料がたかくつくからと、いかにモデル化するか頭を悩ましていたのです。が、そんなことに時間をかけているより、計算した方が早くて安い時代になっているようです。

たった、20や30の未知数の方程式を解くのに、計算センターまで出かけ、順番をまち、結果をもらいにいった頃が懐かしく思い出されます。今では、机の上のパソコンがたやすく解いてくれるのですから。

考えてみますと、随分長く建築とかかわってきたようです。

希薄な動機で建築を選び、学生時代に見たスライドで構造に興味をもち、何となく続けてきたこの仕事。けっこう自分にあった仕事ではないかと思っています。これからは、興味をもって設計していきたいと願っております。